Ⅳ．スポーツ社会学の周辺

1．保健社会学の対象と方法をめぐって
―関連分野の研究領域と方法の文献解題的検討―

藤田　和也

はじめに

保健社会学は、そう呼ぶだけの学的領域と方法が確立しているわけではない。本報告は保健社会学を標榜する文献およびその近接領域の文献を手がかりに、それらが扱っている研究対象と方法の析出を試み、その研究領域と理論的枠組みを検討しながら、保健社会学の対象と方法を考えようとするものである。しかし、今回は目を通した文献が限られており、しかもそれらの学的枠組みと研究方法論の析出に作業を絞っているため、内容の細部にわたる読み込みをしたうえでの報告ではないことをお断りしておく。

1．保健社会学およびその周辺領域の文献

保健社会学と冠した文献はそれほど多くない。比較的最近のもので保健社会学および医療社会学関連の文献のうち、その内容を体系的に概説したものや理論的枠組みや方法について言及したものを挙げると以下のとおりである。

＜保健社会学＞

*①『保健社会学――理論と現実――』 若狭 衛他著　垣内出版　1983

②『保健社会学１――生活・労働・環境問題――』　園田恭一他編　有信堂高文社　1993

③『保健社会学２――健康教育・保健行動――』　同　上　1993

④『健康の理論と保健社会学』　園田恭一　東京大学出版会　1993

＜保健・医療社会学＞

⑤『保健・医療社会学の成果と課題』　保健・医療社会学研究会編　垣内出版　1977

⑥『保健・医療社会学の展開』　保健・医療社会学研究会編　垣内出版　1978

⑦『保健医療の社会学』　園田恭一・米林喜男編　有斐閣　1983

⑧『保健・医療社会学の潮流』　保健・医療社会学研究会編　垣内出版　1988

＜医療社会学＞

*⑨『医療社会学』　田中恒男　学文社　1968

⑩『医療社会学』　安食正夫　医学書院 1970

⑪『医療社会学』　ﾌﾘｰﾏﾝ、ﾚｳﾞｨﾝ、ﾘｰﾀﾞｰ著　日野原重明他編　医歯薬出版　1975

⑫『医療社会学概説』　佐久間 淳　大修館書店　1988

*⑬『医療の社会学』　進藤雄三　世界思想社　1990

＜環境社会学＞

*⑭『環境社会学』　飯島伸子編　有斐閣 1993

(*を付したものが今回の検討対象である)

2．保健社会学・医療社会学・環境社会学の対象と方法

1）保健社会学

若狭 衛他『保健社会学』（垣内出版）は、順天堂大学保健社会学教室の門下生たちの編集・執筆によるものである。内容は以下に紹介する章立てからも推察できるように、アメリカ行動科学の理論に基づいた“ヘルスケアの社会学”とも呼ぶべきものである。

（章立て）

Ⅰ．理論の世界

1. 保健社会学の理論構成

Ⅱ. 現実の世界

2. 地域保健　3. 職場保健　4. 学校保健

5. 家族保健　6. 母子保健　7. 障害児保健

8. 老人保健　9. ｲｸｽﾀｰﾅﾙ・ﾍﾙｽ・ｹｱ

10. ｲﾝﾀｰﾅﾙ・ﾍﾙｽ・ｹｱ

同書「第１章　保健社会学の理論構成」によれば、保健社会学は「ヘルスケアの構造と動態を固有の社会学的な視覚から明らかにすることによって、人間存在にとってのヘルスケアの意義と限界を明らかにする」ことをねらいとし、「人間」「健康」「保健行動」「保健的社会化」「保健的小集団」という５つのキー概念を用いて、「地域社会、職場、学校、家族、個人を分析対象とし」、「生と死の境界線上の状況分析を」するものであるという。

その方法としていわゆる社会システム論に基づき、次のようなシステムアプローチの方法を用いるという。すなわち、A. 認識と実践（相互深化）　B. エネルギー（行為の能力、交わり）　C. スペース（エネルギーの交換によって形成する社会システム）　D. タイム（行動＝社会化、コミュニケーション、適応）（発達＝人間と社会システムの変化の過程）

第１章では上記の key words についての解説やシステムアプローチの方法についての説明があるが、２章以降の各論部分では必ずしもその方法によって対象が分析され、内容が展開されているとはいえないのが残念である。

ともあれ、本書は地域や職場、学校、家庭などにおける保健活動のあり方を、社会システム論の方法を用いて追究しようとしているといえ、その成否はともあれ対象と方法を限定した一つの試み（保健活動への社会システム論的アプローチとでもいえようか）といえよう。

2) 医療社会学

田中恒男著『医療社会学』（学文社）は、1968年刊で比較的古いものであるが、アメリカの医療社会学の理論を引きながら、理論的整理をしたわが国ではおそらく初期の文献であると思われる。著者は元東京大学医学部保健学科教授で、同書は氏の主著の一つである。

内容構成は以下のとおりである。

序　章　医療社会学の意義（概念、機能と目的、領域と対象、方法）

第１章　医学における社会学的接近の展開

第２章　社会現象としての健康

第３章　不健康問題の社会病理

第４章　医療過程

第５章　保健行動論

終　章　医療社会学の問題点

序章で、医療社会学の概念として、アメリカで最初に medical sociology という用語を使用した C. McIntire の次のような定義を引いて、これを出るものではないとしている。

"the science of the social phenomena of the physicians as a class apart and separate; and the science which investigates the laws regulating the relations between the medical profession and human society as a whole; treating of the structure of both, how the present conditions came about, what progress civilization has affected and indeed everything relating to the subject." (1894)

要するに一社会階層としての医師にかかわる社会諸現象についての科学であり、医療関係者と社会全体との関係を規定する法則を研究する科学であるとしている。そして、医療社会学研究には、主として社会学者が医療を対象として社会学研究をする sociology of medicine と、主として医療関係者が医療における問題を社会学的に追究する sociology in medicine とがあるとする。この点は、医療社会学に限らずどの分野でも同じ状況があり、今日なおこの立場の違いが問題のとらえ方の違いやアプローチのしかたの違いを微妙に生み出している考えると、古くてなお新しい問題である。

さらに、医療社会学に対する社会的要請には、

①現実に存在する医学的諸問題を社会科学的見解を応用していかに解決するかという実践的側面と、②医療の枠組みをはじめ医療過程や保健行動における諸社会学的現象についての社会学的な分析・探究としての学的側面があるとする。

研究領域としては、アメリカの医療社会学者の提示する領域を紹介しつつも、著者自身の領域構想を次のように提示する。

1. 医療の社会的分析
   患者－医者関係を中心とした医療関係論、社会的役割論に関連した分析
2. 疾病や健康に関連する社会的要因とその機序の研究
   疫学的分析、人口論、生態学的研究、社会成因論などに関連した分析
3. 保健機関・医療組織に関する産業社会学的研究
   病院の地域性や行政的機構・制度などに関する分析
4. 社会集団の保健認識、行動体系の分析
   社会的な制御要因に関する分析
5. 保健・医療に関する社会技術に関する分析
   文化人類学や社会心理学を中軸とする行動科学的アプローチ

方法としては、方法論の体系的提示は現段階では困難で、一般社会学的方法の準用に待つほかないとして、次の項目をあげる。

調査（research and survey）、測定（measurement）、観察（observation）、思惟的推論（theoritical presupposition）、数理解析（mathematical analysis）。

1960年代後半としては、わが国ではおそらく先陣を切ってのアメリカ医療社会学の紹介であり、またかなりしっかりした理論的枠組みの提示をしているといえるが、その後の発展と四半世紀を経た現在のこの分野の到達水準はどうであろうか。

進藤雄三著『医療の社会学』（世界思想社）は、前掲著の20年余後の1990年刊であり、近年の水準を推し量ることのできる文献といってよい。但し前著は医学関係者が書いたもの（socioligy in medicine）であったが、これは社会学者による医療へのアプローチ（ sociology of medicine）である。内容構成は下記のとおりであるが、医療社会学の研究史と研究方法論を論じた力作である。

Ⅰ. 医療社会学概観
Ⅱ. 医療社会学の歴史的展開
Ⅲ. 医療社会学の分析範疇
   病人役割論、病気行動論、医師－患者関係論、医療専門職論、医療組織論、医療化論
Ⅳ. 医療社会学の課題領域（文献解題）

同書によれば、医療社会学の源流は、1894年にMcIntire が medical sociology という語を初めて使用したときにさかのぼるとのことであるが、当時、社会環境の改良によって乳幼児死亡率・母親死亡率を減少させ、産業労働者の刊行状態を改善させようとした19C後半の社会医学運動を受けて、彼がその語を使用したという。そして、1945～50年代がアメリカにおける現代医療社会学の成立期であるとし、さらに、1959年にアメリカ社会学会に「医療社会学部会」が発足し、現在では社会学会の中で最大の部会になっているとのことである。

また、医療社会学の内容の多様さに触れ、アメリカの医療社会学会が扱うトピックを次のように紹介している。

1. 医療と保健・医療ケアの社会的側面
2. 保健・医療経済学
3. 治療法の社会学と人間科学
4. 健康と保健・医療ケアの社会疫学・社会生態学・社会生理学
5. 保健行動と病気行動
6. 家族と保健・医療ケア
7. 高齢者の健康と保健・医療ケア
8. 障害とリハビリテーションの社会学・社会心理学
9. 病院と保健・医療ケア組織
10. 国民保健・医療ケアシステム
11. 保健・医療ケアの政治的・倫理的・法的側面
12. 保健・医療計画と健康増進
13. 保健・医療サービスの調査研究
14. 社会的医療問題

さらに、アメリカの医療社会学の研究領域について、医療サイド当事者による分類とその評価を次のように紹介している。短い評価コメント（＊印）であるが、なかなか興味深い。

1. Sociology in Medicine（社会疫学）
   ＊ 有用性の是認、重要性の評価
2. Sociology of Medicine（保健医療スタッフ・行政組織・制度の研究）
   ＊ 伝統的「公衆衛生」のトピックス
3. Sociology for Medicine（社会調査技法の応用、ex. 患者の満足度）
   ＊ 有用の場合は受容されるが、技法の有効性は未検証
4. Sociology from Medicine（保健医療スタッフの社会学的研究、ex. 専門職論）
   ＊ 医療サイドからの好意的協力、しかし結果の解釈は異なる
5. Sociology at Medicine（保健医療の政治的分析、ex. イリイチ、マルクス主義）
   ＊ 多数の臨床家にとって困惑させられる領域
6. Sociology around Medicine（保健医療をめぐる学際的領域、ex. 医療・医学と経済学・人類学・民俗誌・倫理学・哲学・法学）
   ＊ 社会学以外の領域、その保健医療における役割については多様な意見

また、医療社会学のジレンマとして指摘している次のような点は、社会学における古くて今なお新しい問題であり、スポーツ社会学においても同様であろう。すなわち、「医療社会学が保健医療を対象とした社会科学或いは行動科学と互換的に使用されるということは、この学問領域の母体である社会学が19世紀以来悩まされ続けた学問論的問題――総合科学としての社会学か個別科学としての社会学か――に再び遭遇していることを意味する。」

さらに続けて次のようにいう。「諸学を統合する原理がないのが社会学の特質の一つであり、先の６領域のうち社会学固有の領域は３と４であるが、３は技法としては固有ではないので、残るのは４だけとなる。しかし、１、５、６を排除すると医療社会学の自己否定につながる」というわけで、いかにも社会学らしいジレンマを吐露している。

医療社会学の理論的枠組みについては、次のように説明する。

まず、医療社会学と社会学との関係について、医療社会学は「医療現象を社会学的視点・技法を用いて分析する社会学の一下位部門」であり、「健康の維持と、疾病の予防・緩和・治療活動にかかわる社会集団を同定し研究する科学である」としている。

医療社会学の扱うトピックと理論的（方法論的）視座について次のような表に整理している。

医療社会学のトピックと視座

水準	トピック	視座
全体社会	保健医療システム 政治・政策	コンフリクト理論 （政治経済学） 機能主義
社会関係	医師－患者関係 専門職組織 病院	機能主義・相互作用論（役割理論 職業社会学・組織理論）
個人	病気体験・病気行動	現象学・相互作用論

そして、アメリカの何人かの医療社会学者の提示する研究領域を紹介した後、著者の構想する研究領域を次のように提示している。

1. 医療サービス利用者の社会学
   社会疫学、病人役割、病気行動、医師－患者関係
2. 医療サービス提供者の社会学
   医師、看護婦、その他
3. 医療組織の社会学
   病院組織、病院における人間関係、精神病院
4. 医療システムの社会学
   保健医療政策・政治経済学、医療産業複合体、医療と家族、医療化
5. 加齢と死、ＱＯＬの社会学
   加齢、死と死にゆく過程、ＱＯＬ

3）環境社会学

飯島伸子編『環境社会学』（有斐閣、1993）は、1992年10月に発足した環境社会学の主要メンバーたちの共同執筆による一種のテキストとして編まれたもののようであり、内容は次の章立てにみるように、「環境問題の社会学」とも呼べるものである。

第１章　環境問題の社会学
第２章　環境破壊の社会的メカニズム
第３章　社会制御としての環境政策
第４章　健康問題と被害のメカニズム
第５章　環境問題と社会運動
第６章　生活環境と地域社会
第７章　健康問題と生活文化
第８章　開発途上国の環境問題
第９章　環境社会学の課題と方法
第10章　環境問題の社会学的研究

同書は、「環境問題に関する社会学的研究は、日本において主として農村社会学や地域社会学研究の中で開始され、ここに社会運動論、生活構造論、政策決定論、組織論、都市社会学、保健社会学、科学・技術論などを専攻していた研究者が加わって、しだいに環境社会学へと形を整えてきた」とし、環境社会学を次のように定義している。すなわち「物理・化学・自然的環境＝『環境』とそれらの変化や悪化と関連して、人間生活、人間集団、人間社会、社会関係などに発生するさまざまな影響や問題＝『環境問題』に関する社会学的研究の総称」。

そしてその研究の方法は、環境問題の発生・顕在化から問題解決に至る過程で、当該地域の社会構造、被害構造、社会組織の機能、被害構造の変動過程などの一連の実証的分析を行う。こうした実証分析の積み重ねのなかで理論構成を進めるとし、その分析の枠組みを次のように提示する。

1. 社会構造の分析
　環境問題の発生する社会的メカニズムを中心にその地域社会の社会構造を分析・解明する。
2. 被害構造の分析
　環境問題の被害構造の地域的特質とその複合性を明らかにする。
3. 社会組織の機能分析
　環境問題にかかわるさまざまな社会組織を析出し、その問題の展開過程での機能を分析する。
4. 被害構造の変動過程の分析
　被害者－加害者の関係から質的に転換し、それぞれが被害者・加害者でありながらその問題の解決の主体に転換する過程を見い出し・分析する。

３．まとめにかえて

以上、保健社会学と近接する分野の研究対象と方法および研究領域を概観してきたが、共通に言えることは、いずれの分野も社会学が抱える固有領域の確定の不分明さと研究方法上の多様さを反映していることと、互いに近接分野は相互に視野の範囲（研究対象）をかなりオーバーラップさせていることである。当分はこうした状態を引きずりながらそれぞれの分野の研究の深化と理論形成がなされていくのであろうと思われる。

こうした状況に勇気を得て、未成熟ながら筆者の保健社会学構想のアウトラインを示してみたい。

保健社会学の対象と方法

保健社会学とは、人々の健康の形成・維持、破綻、回復の過程における社会的諸事象を社会学的視点と方法を用いて分析し、人々の健康の維持と保障のあり方を考究する研究分野（社会学の一分野）ということができる。そして、その研究領域はその３過程における社会学的アプローチによって次のように構成される。

1. 健康の形成・維持過程と社会
　健康と文明（健康観の変遷）
　発育・発達と社会・文化とのかかわり
　健康行動・健康教育と社会
2. 健康の破綻過程と社会
　健康問題と社会（健康問題の発生過程）
　病気と社会（病気の社会史）
3. 健康の回復過程と社会
　病人役割・病気行動、医師－患者関係
　医療従事者、医療組織、医療システム